

書評

鈴木晋介『つながりのジャーティヤースリランカの民族とカースト—』

京都：法蔵館、2013年、398頁、6500円＋税、ISBN978-4-8318-7438-2

川島耕司

本書はスリランカのエステート・タミルとその周囲のシンハラ村落におけるアイデンティティのあり方について、長期にわたるフィールドワークをもとに探究した力作である。著者(鈴木)は、小田亮のいう「誰もが一貫したアイデンティティの形成などなしに自己を肯定的に形づくる生活の場」をこれらの社会のなかに見だし、「アイデンティティ・ポリティクスへとはけして向かわないようなシナリオ」を提示している。そしてこの「別のアイデンティティのあり方」を探究する興味深い道具として、修辞学の三つの術語である「提喩」、「換喩」、「隱喩」を使用している。著者はこうして、提喩的な〈括り〉のアイデンティティではないもの、つまり換喩、隱喩による〈まとまり〉、〈つながり〉のアイデンティティのあり方をエステート・タミルの社会とシンハラ村落のなかに、特に人々が口にするジャーティヤという概念のなかに見いだそうとする。いうまでもなくこのテーマはアイデンティティ・ポリティクスが民族を分断し、対立を硬直化させているスリランカ、あるいは南アジア一般における今日の状況に対してきわめて重要な示唆を与えるものであろう。

本書はエステート・タミルのカーストに関して近年に行われた本格的な調査であるという点のみにおいても貴重である。同様の研究は1950年代のジャヤラマンのものと、1980年代のホラップのものがある。本書のフィールドワークが行われたのは2000年3月から2001年9月にかけてであり、通時的な変化を知る上で重要である。そして本書によればカーストに関わる状況は上記の研究とは大きく異なるものであった。先行研究はカースト制度は根本的な部分では変化していないとしていたのであるが、本書の調査地では、まず浄・不浄価値概念が融解し、階層化原理ではなくなっているという変化が起こっていた。ケガレに関連する「スツタム」、「アスツタム」、あるいは「ティーットゥ」という語は「世俗内階層性のイデオロムとしてはほとんど表れない」と著者は述べる。

また内婚集団内の階層性が融解し、エンドガミー規制が極度に緩むと

いう状況にあるという指摘も重要であると思われる。結婚に関しては、交叉イトコ婚が好ましいとされているが、実際に系譜がたどれなくてもあらゆる結婚が事後的に交叉イトコ婚であったかのように成立する。その結果、人々は親族関係のない他者、さらには異カーストとされていた者とも結びついてしまう。調査地ではこうしてカースト・エンドガミーはなし崩し的に崩壊していた。さらにこの過程で個別のカーストの「名称抹消のプロセス」が発生した。本書によればこのようにしてエステートではジャーティヤは「つくり直され」、人々は「エステート・タミルという巨大なカースト」を生きようとしている。そしてこの巨大なカーストは、単に従来のカーストが意味をなくしたことによって生まれただけではない。括りとは化していたカーストが人々に生きられる形に整形し直されるという状況も生じている。つまり提喩的な括りのジャーティヤから換喩、隠喩的な「排他的範囲線を伴わない」つながりのジャーティヤに変わってきたと著者は議論している。

本書はまた、エステート近隣のシンハラ村落におけるカーストに関しても精力的な分析を行っている。シンハラ社会のカーストは現在きわめてみえにくくなっており、先行研究も明らかに不十分であるなかで本書の試みは貴重である。本書によれば、そこにあるのは「カーストに違いなどない」というおきまりの語りであり、「カーストというものが限りなく抽象的な括りと化していく状況」であり、カーストと生活の脈略とが乖離している状況である。カーストと所得水準の間に相関はない。「ゴイガマはウサイ(高い)」という意識はまだ存在するものの、「ゴイガマであること」の社会関係資本の極端な目減りがある。政治的にもカースト内に異なる支持政党があり、逆にリーダー格レベルではカースト横断的な連携が形成されている。そのため政治上の争いはカースト集団内部での対立をもたらすのであり、カースト集団間のそれをもたらすわけではない。カーストの括り自体はあるし、互いにカーストは分かっているのだが、それがカーストをめぐるアイデンティティ・ポリティクスには向かわないと著者は主張する。

エンドガミーに関しては調査地のシンハラ社会にはそれを維持しようとする強い意識がある。実際異カースト婚は少ない。しかし著者は調査地の村にあった3組の異カースト婚を詳細に調べ、これらの異カースト婚は親族のつながりによって超克が図られていることを示す。そして

「人々のエンドガミーへの固執は提喩的な括りの固守にあるのではなく、つながりを紡ぎ続ける意思として現象していると捉えた方が実態に近似する」と議論している。集団の範囲は偶有的であり、未来において変化する潜在性を伴っており、そこにあるのは開いたつながりの論理である。村人たちは「村の連中」が表象するところのつながりのなかに生きており、その意味でカースト的エンドガミーは「最後の難関」であると本書はとらえている。

本書の調査地におけるタミルとシンハラがそれぞれ一つのジャーティヤになっていて、地位の高低による差異化が存在するのであるが、そこにあるのは「排他的差異化」というより、むしろつながりに連なる「対他的差異化」であるという指摘も興味深い。二つのジャーティヤは明確に序列化しており、それは呼びかけやさまざまなふるまいに明確に表れている。シンハラの村人がタミルたちをひとくくりにして悪態をつくこともある。エステート・タミルたちはまるでシンハラの低カーストのようにふるまう。しかしこの「シンハラ／タミル」という二つのジャーティヤは生活のなかで結ばれ、人々は括りを突破しようとしている。両者の序列を示す作法は「分断ではなく、人々を結びつけるべく運用されている」。特にエステート・タミルたちは分断線をぼかし続け、提喩的な括りのジャーティヤを換喩、隠喩的なつながりのジャーティヤに変換し続けているのであり、そこにあるのは「アイデンティティ・ポリティクスのシナリオとは全く異質な光景」と本書は主張する。

以上が私なりにとらえた本書の概観であるが、若干の疑問点について記したい。一つは、本書の研究対象となったエステート・タミル社会は、さまざまな点においてきわめて不利な条件のなかにあるかなり特殊な社会なのではないかということである。本書にあるように、調査地のタミルたちは、選挙権をもたず、労働組合員としての意識もたず、圧倒的に優勢なシンハラ村落に囲まれ、教育レベルは非常に低く、さらには子どもの教育をタミル語で行うこともできないという地域である。また経済的には「低水準における均質性」によって特徴づけられる社会である。彼らが一つの「巨大なカースト」をつくり、「シンハラ／タミルという排他的分断線」を生活のなかから排除しようとするあり方は、このように圧倒的に不利な状況から生まれたかなり特殊な状況から生まれたものであり、相対的に有利な条件にあるようにみえる中央高地の大規模

茶園地帯のエステート・タミルたちのアイデンティティ形成にも本書の議論は適用できるのであろうかという疑問である。たとえば比較的近年の調査によれば、インド・タミルの社会において高位カーストは低位カーストよりも一般的に経済的により豊かであり、世俗的権威や権力構造においても支配的であり、結婚においてもカーストがかなりの程度厳格にまもられ、高地タミル(Malaiyaha Tamils)という形で民族的アイデンティティをより強く主張しようとする動きもあるともされる¹。調査地のエステート・タミルたちの経済水準や政治意識が相対的に向上した場合、どのような状況が生まれるのであろうか。

2つ目の疑問は、第1の疑問と関連するのであるが、本書が描いたエステート・タミルたちの括りを拒否し、つながりを求める戦略から現状を変革するような動きはどのように出てくるのであろうかということだ。本書は確かにアイデンティティ・ポリティクスへの抵抗のあり方については非常に明確に提示している。しかしスリランカ社会において明らかに不利な立場にある彼らは、その社会的、経済的、政治的状況に対してどのように「抵抗」し、状況を変えようとしているのだろうか。あるいは今後それはどのように出現しうるものなのだろうか。さらにいえば、彼らが自らの状況を改善しようとするより能動的に行動した場合、「括りのアイデンティティ」に抗して「つながりのアイデンティティ」を維持することはより難しくなるのではないか。中央高地で頻発してきたシンハラ／タミルの抗争の原因の一つはそこにあるようにも思える。そうしたときに本書の描いたアイデンティティ戦略はどのようなものになるのだろうか。

ただ、こうした点はおそらくさらなる研究のなかで解決されていくものであろう。アイデンティティの異なるあり方について、提喻、換喻、隠喩といった修辞学の用語を用いつつ〈括り〉と〈つながり〉といった形で理論的に提示し、それを精力的な現地調査によって検証しているという点で、本書が非常に貴重な研究であることは明らかである。スリランカ社会の現状分析のみでなく、アイデンティティのあり方に関する根源的な問題に関して、私自身大きな教示を受けた。本書は、スリランカ研究、あるいは南アジア研究にたずさわる研究者にはもちろん、アイデンティティやナショナリズムの問題に真摯に取り組もうとしているすべての人々に対してもきわめて重要な貢献であるように思われる。

註

- 1 Kalinga Tudor Silva, P. P. Sivapragasam, Paramsothy Thanges (eds), 2009, *Casteless or Caste-Blind?: Dynamics of Concealed Caste Discrimination, Social Exclusion, and Protest in Sri Lanka* Colombo: Kumaran Book House, pp. 78-96.

かわしま こうじ ● 国士舘大学政経学部教授